住井すゑとその文学の里（六十三）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員　栗原（くりはら）　功（いさお）

『橋のない川』の映画化

独立プロの今井正監督による映画化

昭和39年（1964年）4月に『橋のない川』の第4部が刊行されると、映画会社5社以外の映画人らによる映画化が進められた。

折しも、独立プロの巨匠今井正監督が『ほるぷ映画』を設立し、自ら社長に就任して、専務の猪狩拓（詩人の猪狩満直の三男）を、『橋のない川』の映画化の権利を得るために住井宅へ差し向けてきた。今井監督による映画『橋のない川』の第1部は昭和44年（1969年）に製作され、モスクワ国際映画祭ソ連映画人連盟賞を受賞して、翌年、その第2部が製作されている。

今井正の略歴を記述しておくと、明治45年（1912年）に東京・渋谷の寺院に生まれ、芝中学校・水戸高校在学中よりマルクス主義と映画に傾倒、昭和10年（1935年）に東京帝国大学（現東京大学）を中退し、J.O.スタヂオ（後の東宝映画）企画部に入社。2年目にして早くも監督に昇進。市川崑監督は同僚。大東亜戦争中は、自らの信念とは異なる、朝鮮を舞台に日本の武装警官隊と抗日ゲリラとの戦いを描いたプロパガンダ映画『望楼の決死隊』など戦意高揚映画を製作。敗戦後は一転して、民主主義啓蒙映画を手掛け、昭和24年（1949年）に石坂洋次郎原作の青春映画『青い山脈』前後篇を監督、同名主題歌と映画が大ヒット。第一級の監督と評価される『青い山脈』の成功で手に入れた資金を元手にして、東宝から独立。フリーの監督の立場で戦後の民主社会を題材にして描いた作品を次々と発表する一方で、山本薩夫、亀井文夫らと独立プロ・新星映画社を創立し、さらに前進座と組んで日雇い労働者たちの生活の実態を描いた『どっこい生きてる』を発表。ついで東映に招かれて、沖縄戦の悲劇を描いた『ひめゆりの塔』を製作。以後は正木ひろし弁護士の手記に基づく、日本における裁判批判映画（八海事件）の最初の作品『真昼の暗黒』など、社会派映画を次々と製作。その一方で昭和32年（1957年）には、八木保太郎原作&脚色、三益愛子と並ぶ『母物映画女優』望月優子主演による霞ケ浦湖辺の半漁半農生活を営む人々を主人公にした作品『米』を製作。昭和34年（1959年）の人種差別批判をテーマにした作品『キクとイサム（黒人との混血の姉弟と、彼らを引き取って育てる老婆の交流を描く）』は今井の代表作。

今井正は日本共産党員であり、巨匠として日本映画界に長く君臨して、山本薩夫監督と双璧と称された。

東陽一監督による部落解放同盟での映画化

部落解放同盟の映画『橋のない川』製作委員会も平成4年（1992年）に映画化している。

そのスタッフは、監督・東陽一、脚本・東陽一・金秀吉、撮影・川上浩一、キャストは、畑中孝二・渡部篤郎・藤田哲也（子役）・中野聡彦（子役）、兄誠太郎・杉本哲太・趙泰男（子役）、杉本まちえ・安永亜衣・守谷利恵（子役）・真々田瑞季（子役）などであった。

監督の東陽一（ひがしよういち）のプロフィールを記述しておくと、昭和9年（1934年）に和歌山県海草郡下で生まれ、早稲田大学（文学部）卒。岩波映画製作所を経て、昭和37年（1962年）フリーランスとなり自主製作で活躍。昭和48年（1973年）の作品『サード（原作・軒上泊、脚色・寺山修司）』で、映画賞を独占、売れっ子となる。昭和55年（1980年）に五木寛之のベストセラーを映画化した『四季・奈津子』は脚本なしの映像化を試みた。平成8年（1996年）『絵の中のぼくの村』で第46回ベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞。

映画『橋のない川』のポスター。昭和44年上映の映画『橋のない川』（今井正監督作品）のポスター。キャストは、（畑中孝二）大川淳、（兄　誠太郎）高宮克弥、（畑中ぬい）北林谷栄、（畑中ふで）長山藍子。犬田家所蔵。

引用文献　「橋のない川 住井すゑの生涯」北条常久著・風涛社外